

身延山共栄友の会公開講座（法華経講座）

## 第一講 法華経の基礎知識

令和2年6月22日

I 『法華経』とは・・・

1、『法華経』の成立

① 大乘仏教の代表的な経典。大乘仏教の初期に成立した経典であり、誰もが平等に成仏できるといふ仏教思想の原点が説かれている。聖徳太子の時代に仏教とともに日本に伝来した。

① 代表的な説として布施浩岳博士が『法華経成立史』（1934）で述べた説がある。これは段階的成立説で、法華経全体として3類、4記で段階的に成立した、とするものである。第一類（序品・授学無学人記品および随喜功德品の計十品）に含まれる韻文は紀元前1世紀ころに思想が形成され、紀元前後に文章化され、長行（じょうごう）と呼ばれる散文は紀元後1世紀に成立したとし、第二類（法師品・如来神力品の計十品）は紀元百年ごろ、第三類（7品）は一五〇年前後に成立した、とした。

その後の多くの研究者たちは、この説に大きな影響を受けてつつ、修正を加えて改良してきた。だが、近年になって苅谷定彦博士によって、「序品・如来神力品が同時成立した」とする説が唱えられたり、「勝呂信静博士によって二十七品同時成立説が唱えられたことによって、成立年代特定の問題は『振り出しにもどった』というのが現今の研究の状況だ」と菅野博史博士は1998年刊行の事典において解説した。

中村元博士は、（法華経に含まれる）《長者窮子の譬喩》に見られる、金融を行って利息を取っていた長者の臨終の様子から、「貨幣経済の非常に発達した時代でなければ

ば、このような一人富豪であるに留まらず国王等を畏怖  
駆使せしめるような資本家はでてこない。法華経が  
成立した年代の上限は西暦40年である」と推察した。  
また、渡辺照宏博士も、「50年間流浪した後、20年  
間掃除夫だった男が実は長者の後継者であると宣言され  
る様子から、古来インド社会はバラモンを中心とした強  
固なカースト制度があり、たとえ譬喩であつてもこうし  
たケースは現実味が乏しく、もし考え得るとすればバラ  
モン文化の影響が少ない社会環境でなければならぬ」と  
述べた。(日蓮宗事典より)

## ② 『法華経』の漢訳

・『正法華経』十卷二十六品

(竺法護訳、286年、大正蔵 263)

・『妙法蓮華経』八卷二十八品

(鳩摩羅什訳、400年、大正蔵 262)

・『添品妙法蓮華経』七卷二十七品

(闍那崛多・達磨笈多共訳、601年、大正蔵 264)

## 2. 「末法思想」と『法華経』

### ① 「末法」とは

・仏教の終末的歴史観(正法・像法・末法)  
インド

正しい教えは次第に衰え、やがて滅びる、とする考え  
方は、仏教の初期の段階の経や律にすでに含まれている。  
そこでは正法はもともと千年続くはずだったが、女人  
の出家が許されたために正法が五百年になつてしまつ  
た、とするものも多い。

最初はこうした考え方は修行者に対して訓戒として説  
かれていたらしい。だが実際に教団内で争いが激しくな  
ったり、異民族の侵略が起きるようになると、「形だけ

の偽仏教の横行」や「正法の滅尽」という内容が、より現実感をともなつて受け入れられるようになった。

大乘仏教經典には「末の世」という表現は様々な形で現れる。また、こうした時代にこそ仏や菩薩が眞の法を説く、と強調する經典もある。

『大集經』（正式名『大方等大集經』）には「我が滅後に於て五百年の中は解脱堅固、次の五百年は禪定堅固、次の五百年は誦誦多聞堅固、次の五百年は多造塔寺堅固、次の五百年は我が法の中に於て鬪諍言訟して白法隱没せん」とある。つまり最後の五百年では仏教徒の間で論争が闘わされ、正しい教えが隱没してしまふ、とある。末法思想はこの大集經も典拠とする。なお釈迦の生没年は不明であり諸説ある。

## 中国

末法思想は、中国では隋・唐代に盛んとなり、三階教や浄土教の成立に深い関わりを持った。その早期の例としては、北齊・陳の天台宗二祖・南嶽慧思によって記された「立誓願文」に見られるし、隋代以降千年にわたつて継続される房山雲居寺の石經事業も、末法思想によるものである。

## 日本

日本では平安時代の頃から現実化してきた。平安初期には（まだ一般的ではなかつたものの）すでに最澄や景戒には、末法であるとの自覚が見られる。伝教大師が著した（とされるが現在では偽書とみられている）『末法燈明記』の中には「正像やや過ぎ終つて末法甚だ近きにあり法華一乗の機、今正しく是れその時なり何を以て知

る事を得ん安樂行品にいわく末法滅の時なり」と末法が近づいている旨が書かれている。一般的には、特に1052年（永承七年）は末法元年とされ人々に恐れられ、盛んに経塚造営が行われた。この時代は貴族の撰閣政治が衰え院政へと向かう時期で、また武士が台頭しつつもあり、治安の乱れも激しく、民衆の不安は増大しつつあった。また仏教界も天台宗を始めとする諸寺の腐敗や僧兵の出現によって退廃していった。このように仏の末法の予言が現実の社会情勢と一致したため、人々の現実社会への不安は一層深まり、この不安から逃れるため厭世的な思想に傾倒していった。

『末法灯明記』は、現在は末法であつて無戒の時代であることを強調するものであり、これは仏教が墮落し社会が混乱している時代に育つた鎌倉新仏教の祖師たちに大きな影響を与えた。

栄西や、曹洞宗を開いた道元は、釈迦在世でも愚鈍で悪事を働いた弟子もいたことや、末法を言い訳にして修行が疎かになることを批判した。そして修行に努めることを説いた。

鎌倉時代、法然を開祖とする浄土宗は末法思想に立脚し、末法濁世の衆生は阿弥陀仏の本願力によつてのみ救済されるとし、称名念仏による救済を広めた。一方で浄土真宗の開祖とされる親鸞は、師・法然の末法観を受け継ぎつつも、「正像末の三時には、弥陀の本願ひろまれり」「像法のときの智人も、自力の諸教をさしおきて、時機相應の法なれば、念仏門にぞいたりたまふ」（正像末和讃）と説く様に、正法・像法・末法といった時代を超えて受け継がれてきた念仏の普遍性を強調した。また同時期、日蓮も末法思想を真剣に受け止め、末法であるからこそ

信じて行うべき法を求め、法華經こそが正しい教えであるとし（法華一乗）、南無妙法蓮華經と唱えることを広めた。

室町時代後期、戦国時代に入ると、寺社勢力は金融の担い手となっており度々土一揆に襲われたり、千年近くかけて有力寺社が自墾・寄進で増やしてきた寺社本所領が地方豪族によって横領されるなど寺社の経営基盤が大きく揺らいだ。また、この時代の寺社の多くは土一揆に備えたことをきっかけとして施設を要塞化、僧侶は武装、僧兵と化し、日々の修行よりも戦いに明け暮れ、人を殺めるようになり、浄土真宗や比叡山のように戦国大名と交戦したものもあった。また東大寺のように施設を拠点に利用され戦乱の舞台となり焼失した事例も少なくない。人々はこうした数々の出来事を見て、まさに末世が到来した、と判断した。

・『法華經』

「如来の滅後、末法の中においてこの經を説かんと欲せば・・・」（安樂行品十四）

「惡世末法の時、能く是の經を持たん者は・・・」（分別功德品十七）

・最澄撰『末法燈明記』（末法無戒）

・空海撰「正法千年の内は持戒得度の者多く、像法千載の外には護禁修徳の者少し、今当は是れ濁惡、人は根劣惡なり。」

・源信撰『往生要集』「夫れ往生極樂の教行は濁世末代の目足なり」

3、日蓮聖人の『法華經』觀

① 日蓮聖人の「末法觀」

・「在世の本門と末法の初は一同に純円也。但し彼は脱、此は種也。彼は一品二半、此は但だ題目の五字也」

\* 釈尊が靈鷲山（りようじゆせん）で説かれた法華經の本門の教えと末法の初めに弘まらるべき本門の教えとは同じように純円の（完全に円満な）教えである。ただ前者の釈尊在世の本門は「脱」の教えである。これは解脱を得させる教えであるのに対して、後者の末法の初めの本門の法華經は「下種」の教えなのである。

② 「末法下種」こそ日蓮聖人の救済観

・「是好良薬 今留在此 汝可取服（略）遣使還告」

\* 是好き良薬を今（末法）留め此に在く。汝取つて（題目受持）服すべし（下種）

\* 日蓮が慈悲曠大ならば、南無妙法蓮華經は万年の外未来までもながるべし。（報恩抄）末法万年の救済・「末法為正」

\* 正・像・末の三時の中にも、末法の始を以て正が中の正となす。「観心本尊抄」

正法・像法・末法の三時の中でも末法の初めをもっとも中心の対象としているのである）

\* 問て曰く、法華經は誰人のためにこれを説くや。

答えて曰く、方便品より人記品に至るまでの八品に二あり。上より下に向つて次第にこれを読めば、第一菩薩、第二は二乗、第三は凡夫なり。安樂行より勸・提婆・宝塔・法師と逆次にこれを読めば、滅後の生を以て本となす。在世の衆生は傍なり。滅後を以これを論ずれば、正法一千年・像法一千年は傍なり。末法を以て正となす。末法の中には日蓮を以て正となすなり。「法華取要抄」

〔問〕法華經はだれのために説かれたのであろうか。

〔答〕まず法華經の前半の迹門の十四品をみてみると、方便品第二か

ら人記品第九にいたるまでの八品について二つの見方がある。この八品をはじめから順序通りに読んでみると、第一には菩薩、第二に声聞乗と縁覚乗の二乗、第三に凡夫を教化するために説かれたと考えることができる。しかし迹門の末尾の安樂行品第十四から勸持品第十三・提婆品第十二・宝塔品第十一・法師品第十と順序を逆にして読み進んでいくならば、この八品は正しく釈尊入滅後の人々を教化するため説かれたもので、釈尊の在世の人々の教化は傍意であることがわかる。そして釈尊の入滅後の中でも、正法一千年・像法一千年は傍意で、末法のために説かれたというのが真実であり、さらに末法の中でも日蓮が正意である。

\* 今本時の娑婆世界は、三災を離れ四劫を出でたる常住の浄土なり。仏すでに過去にも滅せず、未来にも生ぜず、所化以て同体なり。これ即ち己心の三千具足、三種の世間なり。「観心本尊抄」

今 本時という絶対時間に関き顕わされた娑婆世界は、その根本の災いである火災・水災・風災を超越し、また成劫・住劫・壞劫・空劫という雄大な循環を超越した永遠の浄土なのである。久遠実成の教主釈尊は、もはや過去世において入滅したこともなく、将来の世にも生まれ変わることはない。(このように法華經を説く教主釈尊は絶対にして永遠の仏陀であり、) しかも教化を受ける者もその永遠の釈尊と一体なのである。ということこそ、凡夫の自己の心に三千の法界を具えているということであり、国土世間・衆生世間・五蘊(ごおん)世間という三世間を具えているということである。

\* \*